

国道306号線道路改良事業に伴う

東樺野2号墳・東樺野遺跡発掘調査報告

— 亀山市菅内町所在 —

1992・3

三重県埋蔵文化財センター

序

亀山市から鈴鹿市にかけての鈴鹿川水系は、三重県でも有数の古墳密集地帯として著名であります。今回調査することになった東樺野2号墳も、この古墳群地帯の一角を占める位置に所在しております。

東樺野2号墳は、国道306号線道路改良事業に伴って、事前調査することになったものであります。国道306号線は言うまでもなく伊勢北部の山間部を通る幹道です。地域の生活のなかではなくてはならない重要な道であり、この道路の交通緩和と地域のより一層の発展のためにも、早期の道路改良事業が望まれていました。

このため、結果的に東樺野2号墳は発掘調査を行い、記録保存となりましたが、事前調査することによって、その地域における歴史を改めて認識することにもなりました。埋蔵文化財は、そこから無くなってしまうと二度と元にもどすことはできません。地域振興のために整備された道路が必要なことは言うまでもないことですが、その背後には、かつて我々の祖先が残した足跡が少しづつ消えていることも忘れてはならないでしょう。

調査に際しては、亀山市教育委員会、地元菅内町・阿野田町・南鹿島町の方々、および県道路建設課・鈴鹿土木事務所の各位から、多大なご協力を得ました。文末とはなりましたが、各氏の誠意あるご対応に、心からの御礼を申し上げます。

1992年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中林昭一

例　　言

1. 本書は、国道306号線道路改良事業に伴い緊急発掘調査を実施した東桜野2号墳および東桜野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 東桜野2号墳および東桜野遺跡は、亀山市若内町字上野に所在する。
3. 調査は次の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
技 師	伊藤 裕 伸
研修生	伊藤 徳 也
4. 調査にあたっては、亀山市教育委員会、地元若内町・阿野田町・南鹿島町の方々、および県道路建設課・鈴鹿土木事務所からの協力を得た。
5. 報告書作成にあたっては、泉 拓良氏（奈良大学）、奥 義次氏（県立松阪高等学校）、平子 弘氏（県立神戸高等学校）、浅尾 悟氏（鈴鹿市教育委員会）、亀山 隆氏・山口昌直氏（亀山市教育委員会）、竹内英昭氏（上野市教育委員会）、および駒田利治氏・田村陽一氏・小林 秀氏・穂積裕昌氏（三重県埋蔵文化財センター）のご教示を得た。
6. 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第1課および管理指導課が行った。図版の作成・本文の執筆および全体の編集は伊藤裕伸が行った。
7. 掘図の方位は、全て真北で示している。
8. 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。
9. 遺物観察表の表記のうち、法量はすべて部位の最大部分で測っている。（口）は口縁部径、（高）は高さ、（底）は底部径である。
10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I.	調査に至る契機と経過	1
1.	調査の契機	1
2.	調査日誌(抄)	1
II.	位置と歴史的環境	2
III.	調査の成果 一層位と遺構一	5
1.	東櫛野2号墳の調査	5
2.	墳丘下部遺構の調査	10
3.	中・近世遺構の調査	12
IV.	調査の成果 一出土した遺物一	13
1.	縄文時代の遺物	13
2.	弥生時代の遺物	13
3.	古墳時代の遺物	13
4.	中世～近世にかけての遺物	15
V.	調査のまとめ	23
1.	縄文・弥生時代の遺跡に関して	23
2.	古墳時代の遺跡に関して	23
3.	中～近世の遺物について	24

写真図版目次

図版表紙 埋葬施設全景

図版1 調査前の状況

図版2 調査風景

図版3 中～近世遺構

図版4 埋葬施設

図版5 壊穴住居SH1

図版6 墳丘土層断面

図版7 出土遺物(1)

図版8 出土遺物(2)

図版9 出土遺物(3)

図版10 出土遺物(4)

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 東桜野古墳群および周辺の古墳位置図	3
第3図 調査区近辺地形図	4
第4図 調査前墳丘測量図	5
第5図 調査後墳丘測量図	6
第6図 墳丘東壁および中央東西土層断面図	7
第7図 墳丘中央土層断面図	8
第8図 埋葬施設平面図	9
第9図 墳丘下部遺構平面図	10

第10図 墳丘下部壊穴住居SH1平面	
・土層断面図	11
第11図 墳丘南斜面中～近世土器出土状況図	12
第12図 出土石器類実測図	13
第13図 出土縄文土器・弥生土器実測図	14
第14図 埋葬施設および壊穴住居SH1	
・出土遺物実測図	15
第15図 出土古墳時代遺物実測図	16
第16図 出土中～近世遺物実測図	17
第17図 中～近世土師器皿分類図	18

表目次

第1表 出土遺物観察表(1)	19
第2表 出土遺物観察表(2)	20

第3表 出土遺物観察表(3)	21
第4表 出土遺物観察表(4)	22

I. 調査に至る契機と経過

1. 調査の契機

国道306号線は、津市と北勢地域とを結ぶ主要な幹線道路として存在している。しかし、山間部の集落を連結するように路線があるため、各所において道幅が狭くなっている。そのため、交通緩和と地域振興のためにもよりスムーズな交通路の整備が必要とされていた。

この道路改良事業は、すでに亀山市下庄町から菅内町に至る路線が完了しており、さらに菅内町東桜野地内へと差しかかることとなった。

東桜野2号墳は、隣接する東桜野遺跡とともに周知の遺跡としてすでに存在が知られていたものである。したがって、道路建設に際しては事前の発掘調査が必要であることは既に認識されていた。

当古墳および東桜野遺跡の範囲を確認するために、平成2年7月30日に当センター主事田中久生を担当として試掘調査を実施した。その結果、東桜野遺跡に相当する部分から中世～近世にかけての遺構・遺物が確認され、当古墳を含めた約3,900m²が調査必要範囲として確認されるに至った。ただし、当古墳については視覚的に明確でもあることから、試掘を行わずに本調査に移行することとした。

今年度は東桜野2号墳についてのみ発掘調査を行い、東桜野遺跡相当部分については来年度以降、改めて調査を行うこととなった。

東桜野2号墳の発掘調査は平成3年8月21日から開始し、同年10月15日に全て完了した。最終調査面積は240m²であった。

調査区には直径が1mを越えるような巨木の他、各種様々な樹木が成育していた。そのため、発掘調査は困難を極め、1個の切り株を起こすのに1日かかったこともあった。それでも、無事に終了できたのは作業にあたって頂いた地元の方々のおかげである。ここにご芳名を記して感謝の意を表したい。

(現地調査作業員)

大澤つた 関安文子 関安つたへ 豊田文子

金丸幸子 伊藤多美枝 駒田和子 若林峯子

金丸綾代 伊藤博子 豊田典子 尾崎なぎさ

大澤 修 豊田一男

2. 調査日誌（抄）

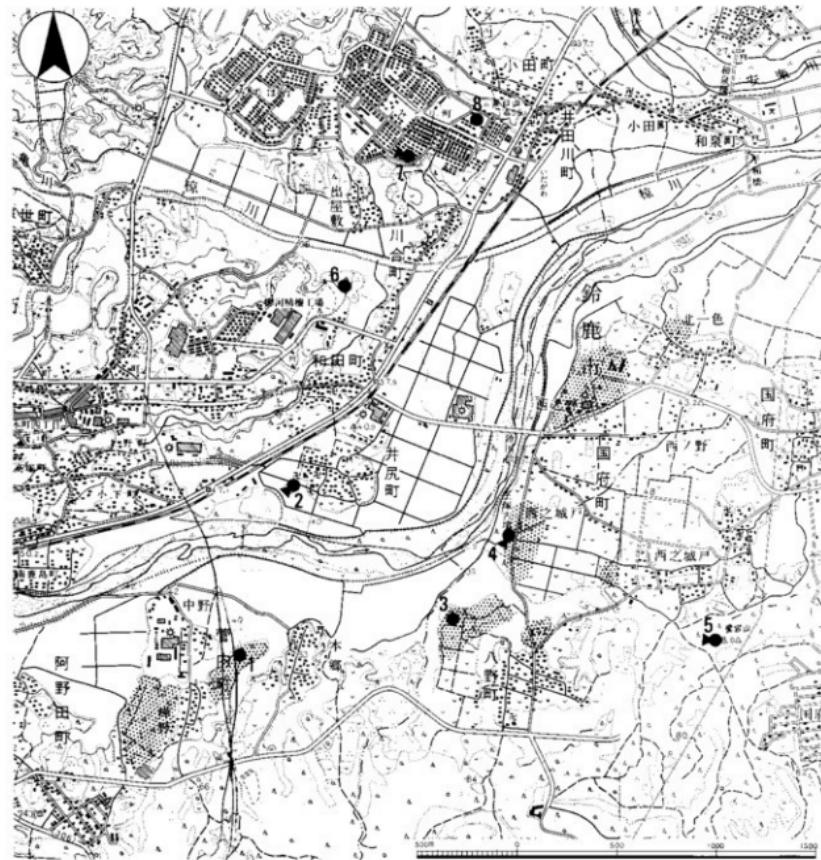
- 1991年8月19日 現地確認。
8月21日 道具搬入
8月22日 墳丘の測量（吉澤良・森川幸雄・伊藤裕偉）、および地区設定。直径12～13mの円墳かと思われた。
8月23日 調査の開始。
8月26日 西端で周溝を確認。
8月28日 墳頂部の調査。土坑（中世）を確認。
9月3日 墳丘南斜面に土師器皿の散布を確認。瓦質土器焼成があり、近世以降ではないかと思われる。
9月6日 墳頂部で埋葬施設の検出にあたるが、明確でない。墳丘南斜面からは、小形土製神祠が出土した。
9月11日 墳頂部の埋葬施設が明確でないため、再度の精査を行う。
9月20日 墳頂部の埋葬施設、依然明確にならない。
9月24日 調査後の墳丘測量（倉田直純・伊藤裕偉・伊藤徳也）。
9月26日 埋葬施設がようやく明確になる。西側の盛土内から磨製石斧片出土。
9月27日 埋葬施設内の西側から鉄鏃出土。ようやく埋葬施設らしくなる。
9月30日 埋葬施設内から須恵器壺出土。
10月2日 埋葬施設の写真撮影および遺物取上げ。盛土内から縄文土器が出土している。
10月3日 埋葬施設の断ち割り。まだ須恵器が出土する。
10月8日 埋葬施設下の炭層を検出。
10月9日 盛土下に竪穴住居（SH1）を確認する。
10月15日 竪穴住居SH1の実測・遺物取上げ。本日にて作業終了する。

II. 位置と歴史的環境

東櫛野2号墳は亀山市音内町字上野に位置する古墳である。当古墳は標高約55mの東に派生する丘陵尾根の北端に立地しており、北への眺望が極めてよいといえる。墳丘から北を望むと鈴鹿川が眼下にあり、その対岸やや右方向には井尻古墳（2）がみえる。さらにその奥には、近年調査がなされた上椎木1号墳（6）が立地していた丘陵や、井田川茶臼山

古墳（8）や城山古墳（7）が存在していた丘陵などが望める。立地は卓越しているといえよう。

このような立地条件は当古墳の近隣に多数存在しており、古墳の数もかなり多いといえる。当古墳が立地する丘陵と巨視的には同一の丘陵といえる鈴鹿市国府町を中心とした地域から当古墳が築造されたあたりまでは、かなりの数の古墳が築造されている。



第1図 遺跡位置図 (Scale=1/25,000 国土地理院「亀山」、「鈴鹿」より)

1. 東櫛野2号墳 2. 井尻古墳 3. 八野2号墳 4. 西野1号墳 5. 愛后山1号墳
6. 上椎ノ木1号墳 7. 城山古墳 8. 井田川茶臼山古墳 ※網目は古墳群

代表的なものは西ノ野1号墳（王塚古墳）（4）や八野古墳群などである。八野2号墳（3）からは布留1式に併行すると考えられる土器とガラス玉が出土しており、当地域の古墳群形成の先駆的存在といえよう。当地域の古墳分布についてはいくつかの解説がなされており、ここでは繰り返さないでおく。

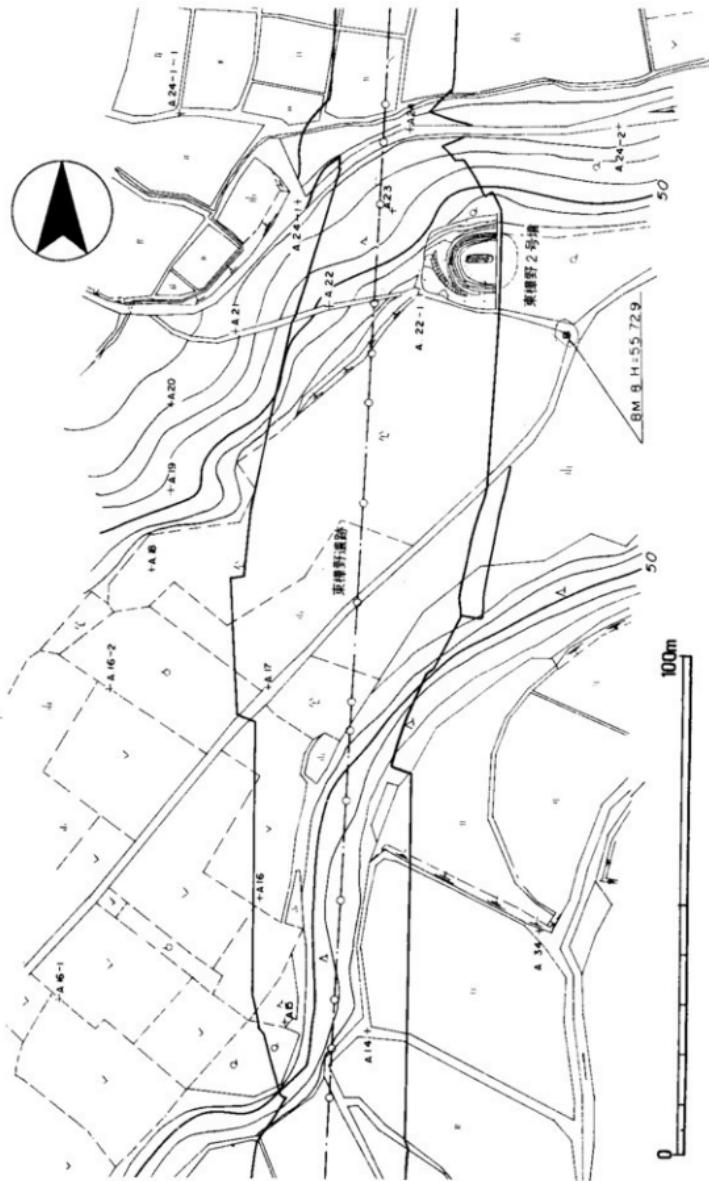
さて、東桜野2号墳近隣の古墳分布についてみておこう。当古墳は、厳密には東桜野古墳群中の1基なのであるが、現在確認できる古墳は当2号墳のほかに、この東方約50mに位置する1号墳と、桜野集落をはさんで西にある9号墳のみである（第2図）。9号墳の存在からは少なくとも9基の古墳が存在していたことが推定できる。地元や亀山市教育委員会

亀山隆氏によれば戦前はかなり多くの古墳が存在していたらしいことがいえる。これらは開墾などによって多くが消滅したという。したがって、現在ではそれらの古墳の位置は全く不明と言わざるを得ないが、かつてこの周辺に多くの古墳が存在していた事実は、東桜野2号墳の調査成果と絡めて重要なことを提示してくれる。これについては「まとめ」の項で触れたいと思う。

なお、当2号墳の東に隣接して、摺り鉢状の落ち込みが存在している（第4図参照）。これは地元の話では神社が鎮座していた跡といわれ、戦前の神社統合によって合祀されたらしい。この神社によって2号墳は開発をまぬがれていたのかも知れない。



第2図 東桜野古墳群および周辺の古墳位置図 (Scale=1/5,000)



第3図 調査区近辺地形図 ($S=1/1,000$ 太線は道路路線範囲)

III. 調査の成果 —— 層位と遺構 ——

今回の調査は、東樺野2号墳の墳丘およびその周溝想定部分についてのみ行っている。したがって、当初は古墳に関連した遺構および遺物のみが検出・出土するものと考えていた。しかし、縄文時代・弥生時代・古墳時代および中・近世の時期についてもなんらかの成果を得る結果となった。

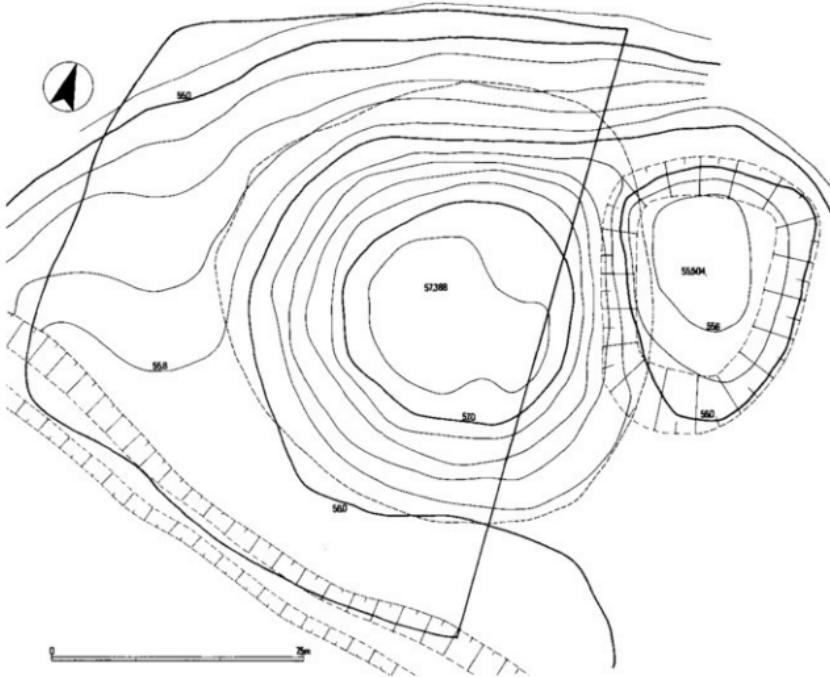
1. 東樺野2号墳の調査

墳丘および周溝の調査

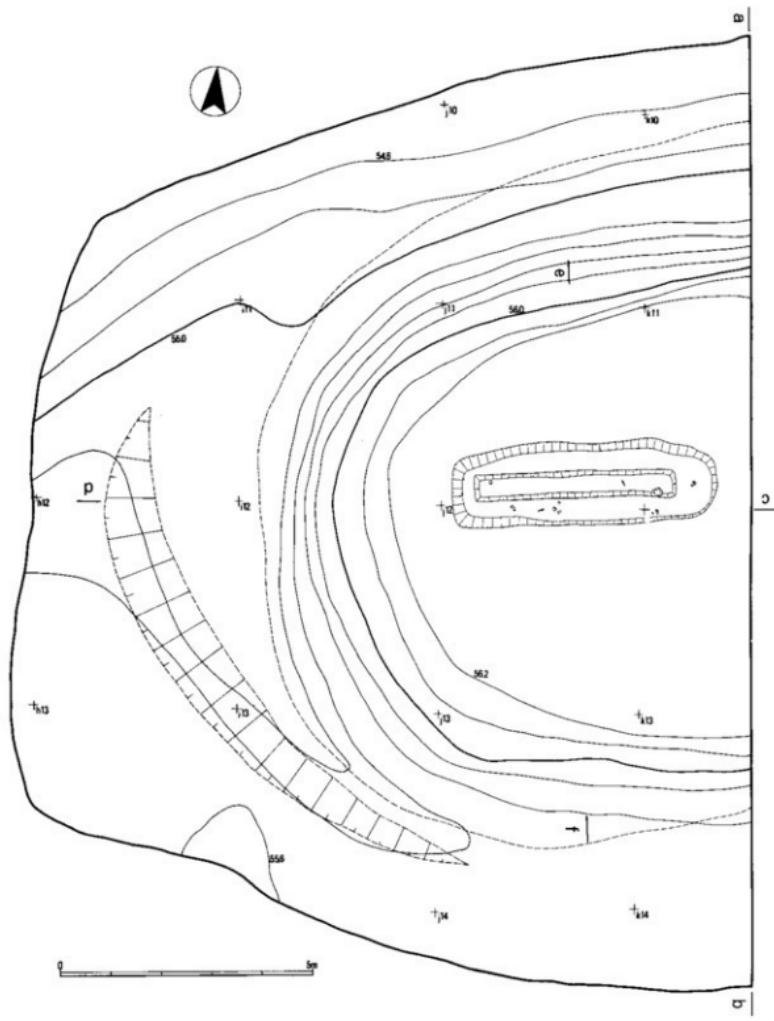
当古墳の墳丘は調査前の状況では直径約13mの円墳と想定された（第4図）。墳丘の高さはおよそ1.3～1.6mで、墳丘の西側には周溝の痕跡らしきものも確認できた。墳丘の東に接して大きな落ち込みが存在している。周溝にしてはあまりにも墳丘と不釣り

合いで、当初はその性格について不明であった。調査の途中で地元の古老に聞いたところ、以前に神社が鎮座していた場所であることが判った。ただし、この位置は調査対象地区外である。

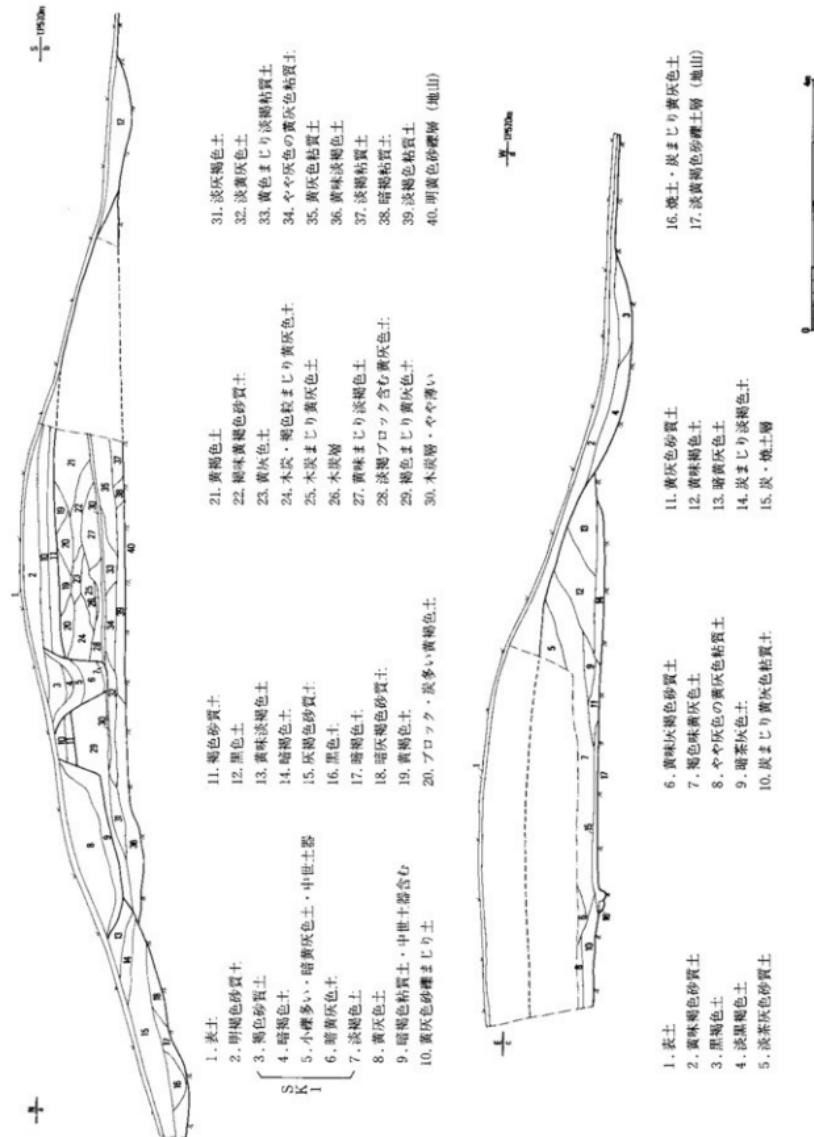
墳丘および周溝の調査は墳丘の中央と思われる地点を中心に東西および南北方向に「十」字形にセクションベルトを設定して行った。その結果、周溝として確認できるのは南西側および南側の一部のみで、北西から北東にかけての部分は墳状に削り出しているものであることが判明した（第5図）。墳丘の削り出しは北側で0.8～1m、南側で0.2～0.5mと差がある。墳丘裾ラインも北側は低く、南側は高い。墳丘が丘陵端部に位置することと合わせて、北側を意識して築造されているものと考えるのが妥当であろう。形態は椭円気味の円墳で直径13mである。



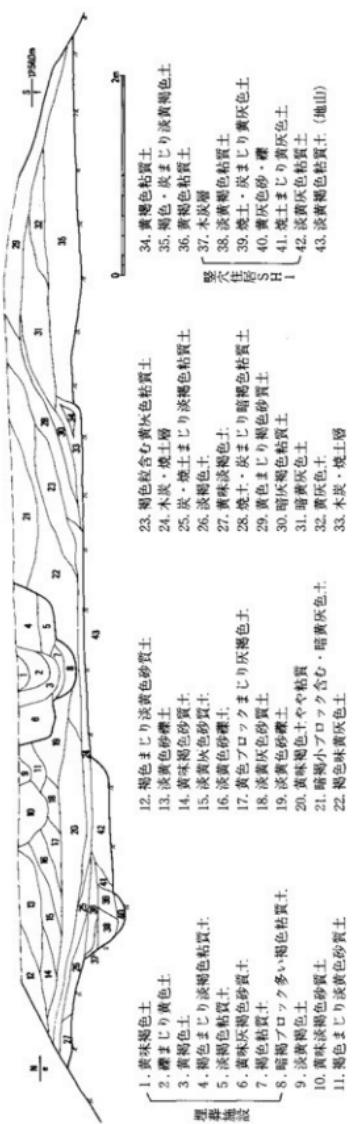
第4図 調査前墳丘測量図 (Scale=1/150) ※太枠は調査範囲



第5図 調査後埴丘測量図 (Scale=1/100) a~fは土層の位置



第6図 塙丘東壁および中央東西土層断面図 (Scale=1/80)



第7図 墳丘中央土層断面図 (Scale=1/50)

当初、墳丘盛土の最上部は、表土直下に認められる層（第6図上；2層）と考えていた。しかし、その層を含めて下部2層（第6図10・11層）までは中世～近世にかけての土器を包含していることが確認された。これらの層は平行に堆積しており、下部の堆積状況とはかなり異なっていることがわかる。このことから、本来の墳丘盛土は第6図上の南北土層では19層以下であることが判明した。したがって、盛土は最高約1.1mである。第6図上の2・10・11層については、墳丘の東に接する神社跡の整地に伴って積まれたものと考えるのが妥当であろう。

墳丘の盛土方法は、第6図下および第7図をみるとよく分かる。この土層からは、南側・北側・西側とも墳丘の端の方から盛土を行い、順次内側へと積み重ねている状況が観察できる。

周溝は西側では幅2～3mであるが、南にいくにしたがって次第にすばまっており、最も狭い南西部では墳丘掘からおよそ0.4～1.0mしか離れていない。通常の周溝とはかなり異なっているといえる。

周溝および北側の墳丘堀には最下層に黒褐色系土が堆積しており、その上部に墳丘崩落土と思われる黄灰色系土が堆積していた。この傾向は周溝の有無に関係なく認められた。いずれの土層中にも遺物の含有は少なく、あえて言えば墳丘崩落土と考えられる黄灰色系土内に含有が多かった。したがって、周溝相当部分に須恵器・土器などの土器を用いた祭祀的なものは想定しにくい。

埋葬施設の調査

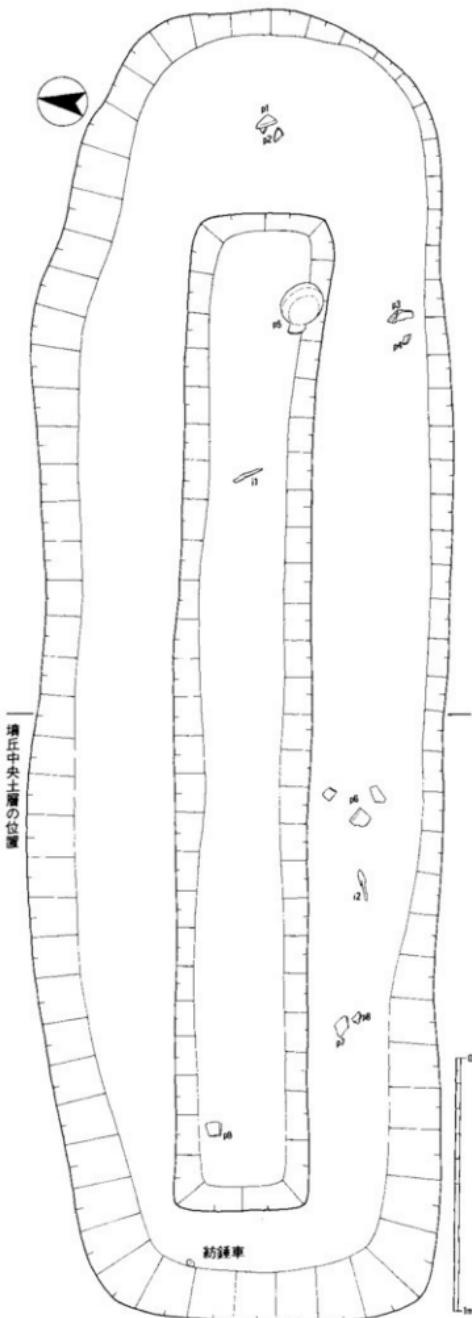
墳丘上に堆積していた表土を剥いだ後、土坑を検出した。しかし、埋葬施設ではなく、中世の遺物を含んだ遺構であることが判明した（SK1、第6図土層参照）。以下、墳頂部から約0.4m～1mの間に数回清掃を行い、それぞれ埋葬施設の検出を試みたのであるが、いずれにおいても埋葬施設を確認するまでには至らなかった。また、出土する須恵器は陶邑窯の田辺昭三氏による編年（以下、田辺編年）のTK23型式に類似したものからTK43型式までのかなり長期にわたる時期のもので、それが全くまとまりなく出土した。そのため、埋葬施設が複数存在する可能性も考えられた。

墳丘を墳頂部からおよそ1.4m下げたところで、漸く明確な埋葬施設を検出するに至った。埋葬施設（第8図）は長軸約5.3m、短軸約1.6mの隅丸長方形の掘形を呈するものである。長軸方向は東西である。当初、北・南辺側の埋土と中央部の埋土とが異なっていたため、2基の埋葬施設が並列して存在しているものかと思われたが、調査を進めていくなかで1基の埋葬施設の埋土が異なるものであることが判明した。

墓壇は検出面から約0.4mで一度テラス状のものをつくり出し、棺相当部分のみさらに約0.2mほど下げる方法を用いている（第7図土層参照）。棺が据えられる一段下がった部分（以下、この部分を「棺状掘形」と呼称する）は長さ約4.0m、幅約0.56mである。断面形状は円弧を描くものであるため、割竹形木棺を据えるためのものではないかと考えられる。木口部分に粘土類を用いて固定していたような痕跡は確認できなかった。

墓壙内副葬品は、棺の長さに比べると比較的少ない。棺状掘形の直上を避けるように、東側に須恵器壺類、西側に須恵器・土師器および鉄鏃が出土した。また、墓壙内の西端からは石製鋤車が出土した。これらは鋤車を除き、ほぼ一定のレベルであり、墓壙のテラスよりも0.2mほど浮いた状態で出土した。鋤車はこれらの副葬品よりも0.2mほど低い高さから出土しているため、埋葬施設に伴うものでない可能性もある。棺状掘形の東木口寄りからは須恵器壺(35)が出土した。この壺は棺状掘形内に相当する位置から出土しているが、棺状掘形の底からはかなり浮いた状態であるため、棺上に置かれたものが棺の腐朽に伴って落ち込んだものではないかと考えられる。

棺状掘形内から出土したものは棺中央部あたりに相当する位置から出土した刀子1点のみであった。この刀子は棺の底からは約0.15m浮いた状態で出土しているために、



第8図 埋葬施設平面図 (Scale=1/20)

棺上に置かれていたものである可能性もある。棺状掘形内の埋土は全てふるいがけをしたが、玉類は出土しなかった。

埋葬施設は、出土した須恵器から田辺編年のT K43型式併行と考えられる。

なお、埋葬施設の南東方向から須恵器坏身が1点出土した（第15図60、第6図上；22層）。この土器の近辺には遺構状の掘り込みは認められず、墳丘土層の観察からは盛土の最中に入れられたものと考えざるを得ない。須恵器の時期としては埋葬施設に併行するものとみてよいであろう。

2. 墳丘下部遺構の調査

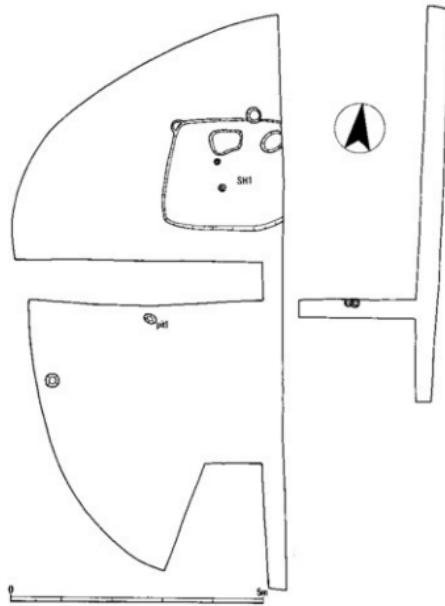
埋葬施設は明確なものであったものの、その基盤となる墳丘盛土内からも須恵器が出土していた。そのため、埋葬施設がさらに存在している可能性も充分に想定されたことと、周溝の調査や墳丘の掘削中に繩文・弥生土器が出土したことから再度掘削を行うこととした。なお、墳丘下部の調査は、時間的な制約と人力ではとても動かしがたい巨木があったため、部分的な調査しかできなかった。

古墳時代の遺構

埋葬施設の調査段階で、棺最下部に接するように炭層の存在することが既に確認できていた。これが旧表土かそれに類するものに相当する可能性も考えられるので、この炭層の表面を追求して検出していくこととした。しかし、炭層は墳丘中央部のみであり、さらに周縁に行くにしたがって徐々に上がっていることが判明した（第7図）。このことから、この炭層については、墳丘盛土時に何らかの行為を行った跡であると考えられる。

炭層を除去し、さらに下部を調査していくと、木炭が固まって存在している場所が確認された。そしてその付近を中心若干の落ち込み状の遺構を確認したので、精査したところ、竪穴住居SH1を確認した。

竪穴住居SH1（第10図）は一辺約2.2mの方形を呈した小形のものである。遺構の北辺はほぼ垂直に掘削されているのであるが、南辺は傾斜の弱い掘形

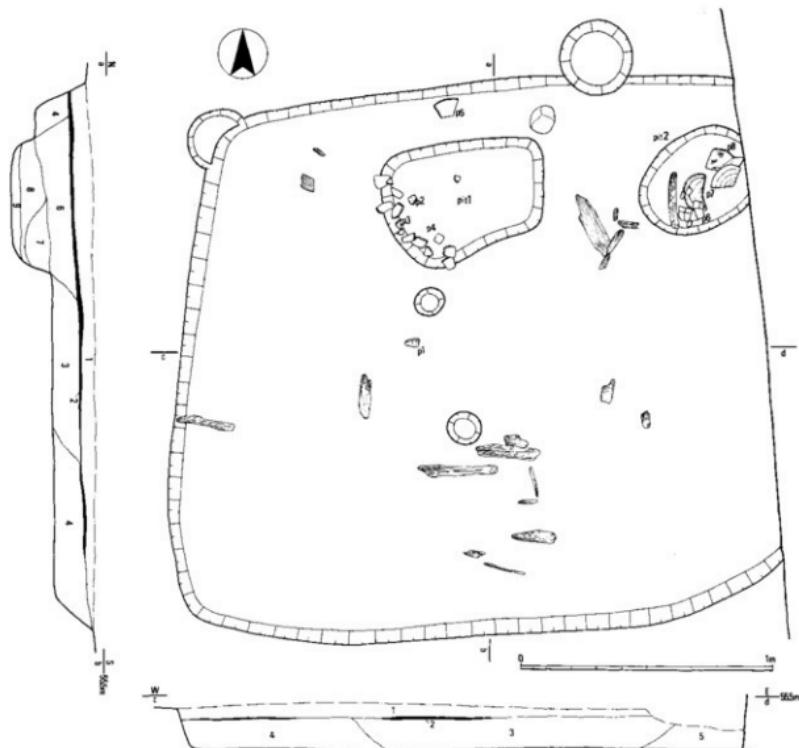


第9図 墳丘下部遺構平面図 (Scale=1/100)

である。埋土上部に木炭が面的に広がっており、焼失住居である可能性も考えられる。主柱穴に相当するものは存在せず、中央付近に直径15cmほどの小さなピット2基と北辺寄りの中央および西寄りにピット2基が存在していたのみである。

竪穴住居北辺中央付近のピット（Pit 1）は、方形の形状を呈するものである。埋土最下層は焼土層であり、その上層に炭層などが存在している。竪穴住居内の位置からはカマドの可能性もあるが、その周囲に馬蹄形状の施設や焼土塊などが存在していないため、その可能性は薄いと考える。埋土内からは須恵器坏蓋の他、土師器甕などが出土した。

竪穴住居北辺西寄りのピット（Pit 2）は、楕円形を呈するものである。ピット内の埋土はPit 1と同様、焼土や炭が認められるものの、Pit 1ほど密ではない。埋土最下層には疊が多く認められた。埋土内からは完形の須恵器坏身と土師器甕が出土した。また、Pit 1とPit 2から出土した土器には接合したものもある。



1. 炭多い黄灰色土
2. 炭層
3. 小礫含む黄灰色粘質土
4. 炭まじり暗黄褐色土
5. 淡黄灰色粘質土
6. 炭・焼土少量含む暗黄褐色土
7. 炭・焼土多量に含む黄灰色土
8. 炭・焼土少量含む黄灰色土
9. 焼土層

第10図 墳丘下部整穴住居SH 1平面・土層断面図 (Scale= 1/20)

堅穴住居SH 1はピット内の土器および堅穴埋土内の土器から田辺編年のTK10型式併行と考えられる。埋葬施設と時期的な隔たりがあまりなく、その性格は注目できる。

なお、堅穴住居SH 1以外にも同一遺構面からはいくつかの遺構が確認できた。東側に設定したトレンチからは焼土・炭のみが入ったピットが検出できた。時期的には堅穴住居SH 1と併行すると考えてよいであろう。

縄文時代・弥生時代の遺構

縄文時代については遺物は出土するものの遺構としては確認できなかった。

弥生時代の遺構は、明確なものはほとんどない。j12グリッドピット1（第9図）から、細片のみながら弥生土器のみが出土したに止まる。しかし、この結果からは当該時期の遺構がこの付近に存在している可能性は高いといえる。遺物では、調査区東端に設定したトレンチの北隅からやや大きめの土器片が出土している（第13図19）。

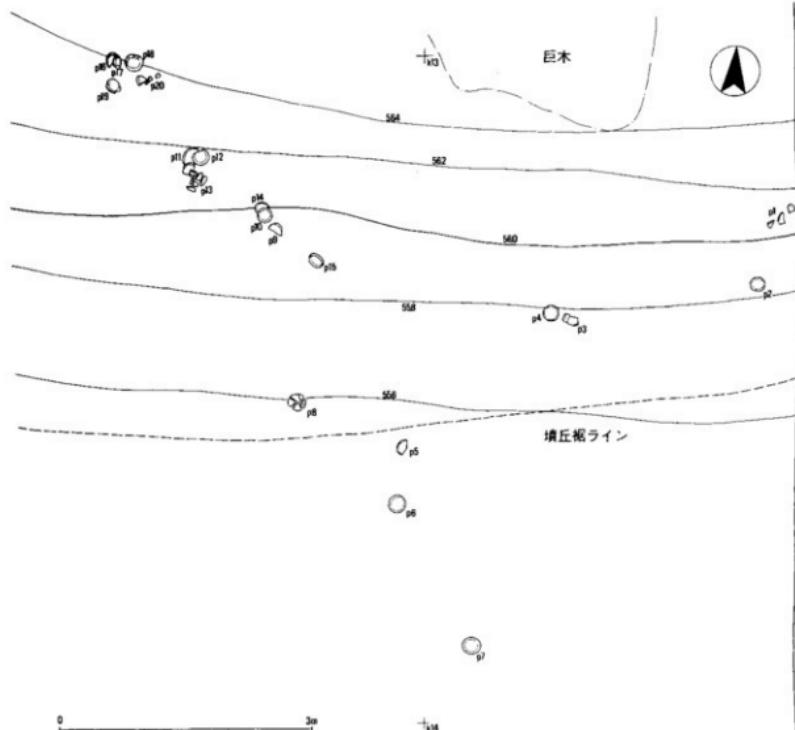
3. 中・近世遺構の調査

中・近世の遺構には、墳丘に掘られた溝状の遺構と、墳丘南側斜面に認められる土師器小皿の散乱部がある。

墳丘に掘削された溝状遺構は墳丘中央やや北寄りに認められる、中世城館に認められる箱築研堀状の断面のものと、それよりやや北に寄ったところに認められるものとがある（第6図上8・9層）。箱築研堀状を呈するSD1は、埋葬施設の調査初期の段階で埋葬施設と間違っていたものである。墳丘の中央部で途切れるので盜掘坑の可能性もあるが、掘削状況があまりにも整っているので、別の目的の遺構とも考えられる。遺構の底付近から完形に近い土師器皿（第16図70）が出土した。この土師器皿は、当

調査によって出土したものでは唯一の南伊勢系のものである。時期は室町時代（およそ15世紀前半）と考えられる。

墳丘南側斜面部には、土師器小皿を中心とする土器の散乱が認められた。これらは、合計50点ほどのものが密集することなく散布する状況を呈している（第11図）。狛犬と鳥帽子を被った人物を表現した小形土製神祠（第16図107）や「神」と墨書きされた土師器がある。そのため、墳丘の東に接して存在していた神社に関連して、何らかの祭祀の後、投棄されたものと見るのが妥当であろう。



第11図 墳丘南斜面 中～近世土器出土状況図 (Scale=1/30)

IV. 調査の成果 —— 出土した遺物 ——

出土遺物には縄文～古墳時代の遺物、および中～近世の遺物がある。古墳時代では古墳に伴うもののはか、下層の竪穴住居に伴うかそれ以前のものが含まれている。遺物の詳細については観察表を参照していただきこととし、以下、各時期の特徴について順次記述する。

1. 縄文時代の遺物（第12・13図）

縄文時代の遺物には、土器のほか磨石および石器の剥片がある。土器類では、外面に条痕文を施している一群のはか、縄文を施したものと渦巻文を施したものがある。これらは表土ないしは墳丘盛土内に含まれていたもので、共伴関係は不明である。

外面に条痕文を施している一群には、条痕文のみが認められるもの（9～13）のはか、円棒状工具によつてキザミ・刺突・押し引きなどの施文をおこなっているものがある（3～8）。底部もあり、平底であることが窺われる（13）。施文の状態から、これらは早期末の広義の茅山下唇式に併行する一群と考えられる。

縄文を施したものと渦巻文のもの（14～15）は中期頃を中心とした時期と考えられる。

磨石（1）は形態から縄文時代のものと考えられる。上下を磨面として用いており、かなり使い込んでいるようである。赤変しており、熱を受けたものと思われる。剥片にはチャートのものがある。

2. 弥生時代の遺物（第12・13図）

中期に比定できるものと、後期に比定できるものがある。後期に比定できるものには古墳時代初頭の土器かと思われるものも含まれているが、記述の便宜上、弥生後期の土器と一括しておく。土器以外では磨製石斧がある。

確実に中期といえるものは、壺（16・18）・甌（26）・蓋（24）がある。17は、口縁部形態からは中期の可能性もあるが、頸部に突帯を有することから後期と考えるのが妥当であろう。19も同様に、口縁部の施文方法から後期かと考えられる。口縁部が受口状を呈するいわゆる近江系の甌（25）は、後期

のものと考えられる。ゆるい「く」の字形を呈する甌（26）は中期中葉に相当しよう。壺には中期中葉に比定できるもの（18）がある。

後期に比定できる確実なものは高杯がある。山中一期に比定できるもの（22）と矢山期に比定できるものの（20・21）がある。

石製品では、磨製石斧の破片（2）があり、肉眼では凝灰岩製かと思われる。

3. 古墳時代の遺物（第14・15図）

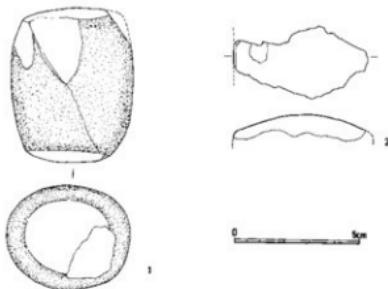
古墳時代の遺物には、東塙野2号墳に伴うと考えられる一群と下層の竪穴住居あたりに伴うものとに区別して考える必要がある。前者には須恵器・土師器・鉄器石製品が、後者には須恵器・土師器が認められる。

a. 東塙野2号墳に伴う遺物

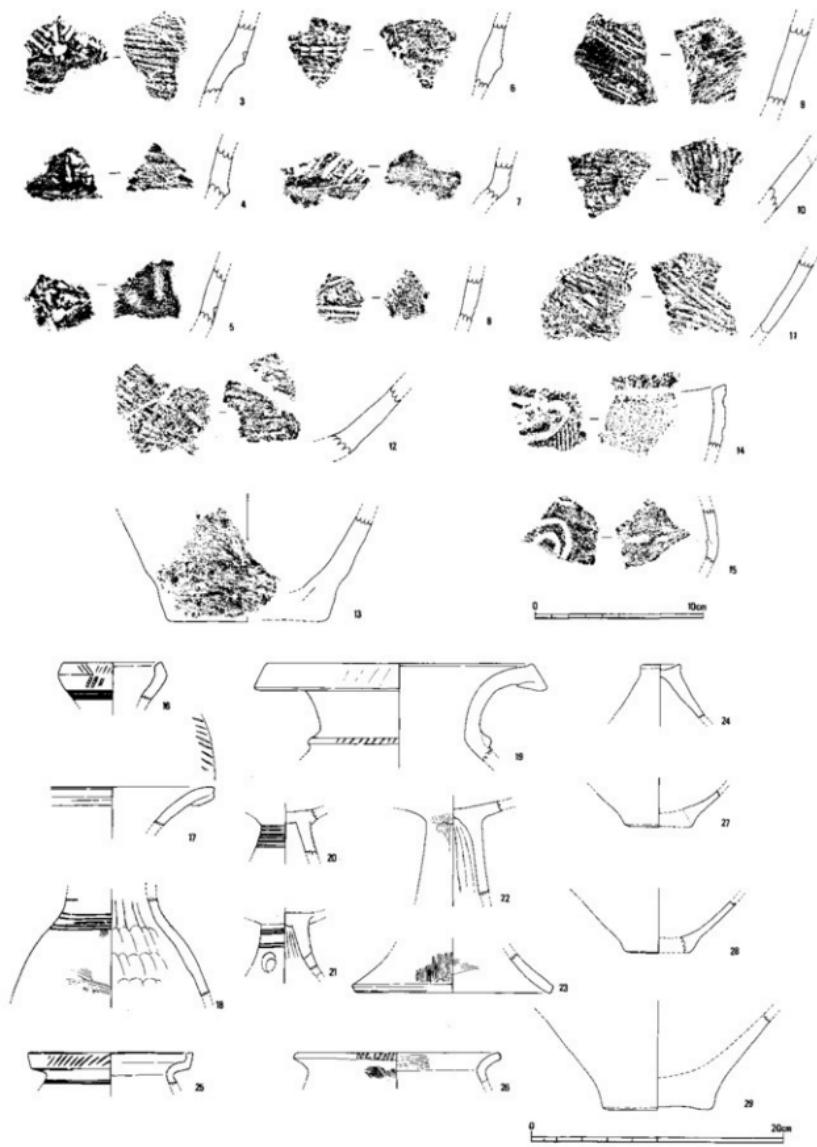
埋葬施設内出土遺物（30～35）

埋葬施設内から出土した遺物は須恵器杯類・壺、土師器類、鉄鏹、刀子、紡錘車がある。そのうち土師器鉢（47）は混入である可能性を考え、埋葬施設に伴うものからは除外しておく。

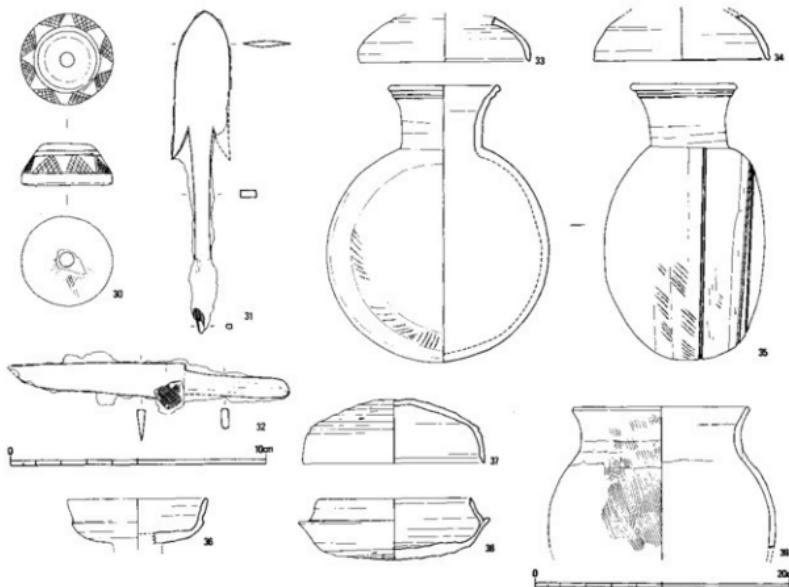
須恵器杯類は田辯編年のTK43型式併行と見做せよう。刀子は柄部に木質や骨角の類が残存するほか、刃部の表面に布目が残っている。鉄鏹はいわゆる短茎式のもので、抉が2方向に認められる。紡錘車は蠍石あるいは滑石製で、側面上部に2本の圓線を施したのちに8個の複線鋸歯文を配している。いわゆる下部平坦面にも放射状あるいは鋸歯文状の文様が



第12図 出土石器類実測図 (Scale=1/2)



第13図 出土縄文・弥生土器実測図 (3~15: 1/3、16~29: 1/4)



第14図 埋葬施設および堅穴住居 S H 1 出土遺物実測図 (30~32 : 1 / 2、33~39 : 1 / 4)

認められるが明確でない。

埋葬施設に伴う遺物は少なめであるといえよう。

埋葬施設外出土遺物 (54~56、59~63)

埋葬施設外で認められた古墳に伴う遺物には、須恵器杯類・壺類以外は明確にし得なかった。須恵器杯類は墳丘上や埋葬施設付近に認められたものであり、型式的には埋葬施設と併行するものである。これらは墳丘の築造あるいは埋葬施設の設置に伴うものと考えられる。

b. 東櫻野2号墳築造以前の遺物

(36~39・43・44・47~53・57・58・64~66)

古墳築造以前の遺物としては、堅穴住居 S H 1 出土の遺物 (36~39) をはじめ、須恵器類・土師器類、および鉄製品がある。堅穴住居 S H 1 出土の遺物は須恵器田辺編年のTK10型式併行と見做せよう。それ以外では田辺編年のTK23型式あたりの須恵器からTK10型式併行までのものが認められる (48~53・57・58・64~66)。S字状口縁台付壺の類 (42~44) およびそれと類似する口縁部を持つ鉢 (47) も古墳

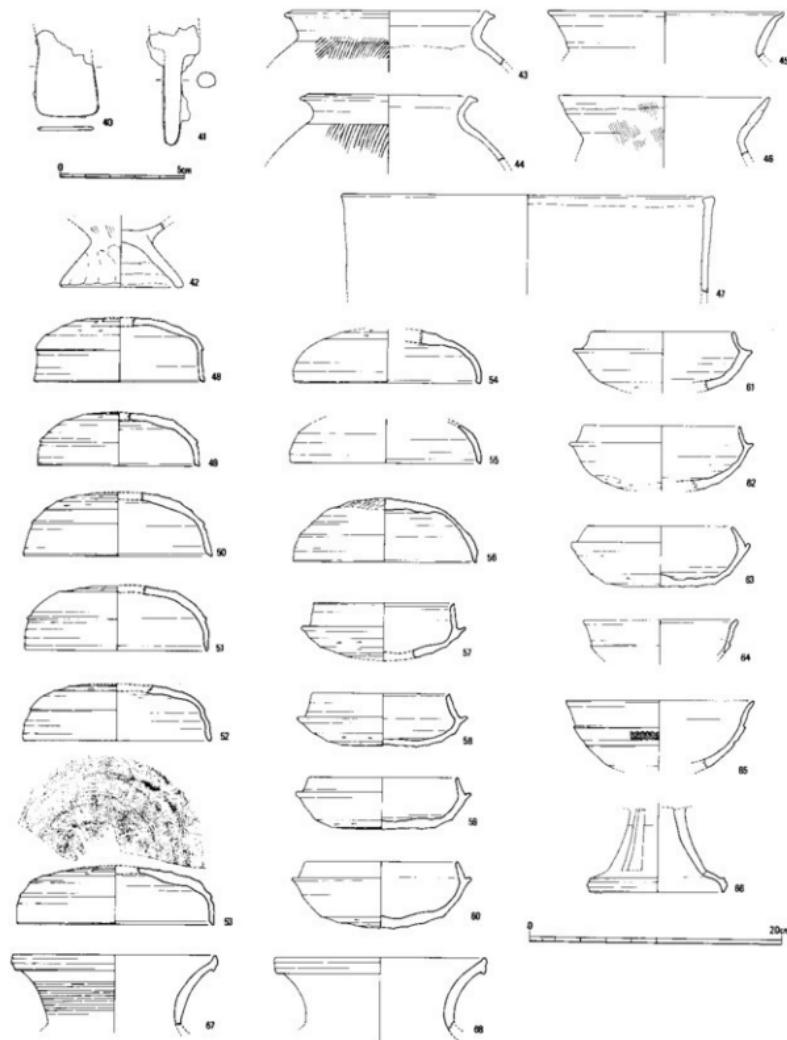
築造以前に伴うものと考えるのが妥当であろう。

埋葬施設とは離れた位置から出土した鉄製品もある (40・41)。40は小札状、41は鉄錠状であるが、残存が悪く、明確なことは言えない。

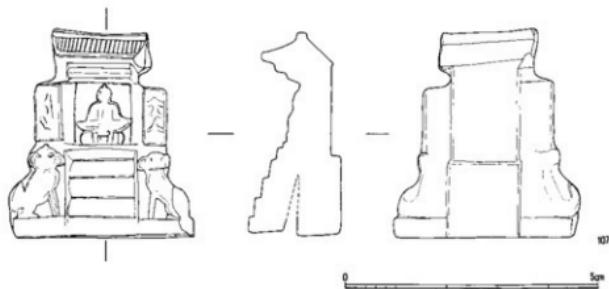
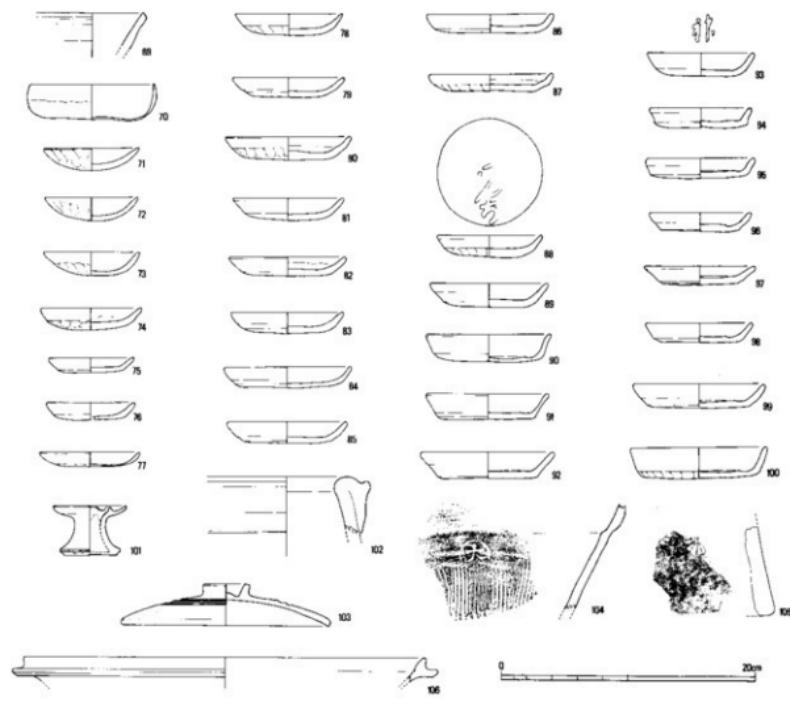
4. 中世～近世にかけての遺物 (第16図)

中世から近世にかけての遺物としては、土師器皿類・陶器類・瓦質土器類、小型土製神祠、および鉄貨がある。鉄貨には明治30(1897)年鋳造の十銭銀貨(竜10銭銀貨)もある。

確実に中世のものとして抽出できるのは陶器碗(以下、「山茶碗」と呼称、69)・陶器壺(102)および土師器皿(70)である。山茶碗は藤澤良祐氏による編年の第IV段階以降、陶器壺はおおよそ16世紀代と考えてよいであろう。70は、今回の調査で出土した当該時期の遺物のなかでは、唯一の南伊勢系のものである。口径が10cm、口縁部がやや内聾気味であるという特徴から、15世紀前半あたりのものと考えられる。



第15図 出土古墳時代遺物実測図 (40,41 : 1/2、他は1/4)



第16図 出土中・近世遺物実測図 (107は1／1、他は1／4)

形態	口径7cm前後	口径8.5cm前後	口径10cm前後	口径11.5cm前後	焼成
A形態					硬質およびやや硬質
B形態					硬質およびやや硬質
C形態					硬質
D形態					やや硬質

第17図 中～近世土器器皿分類図（1／4）

近世に相当するものには、陶器台付灯明皿（101）、擂鉢（104）、瓦質土器培培（106）、および鑄貨がある。擂鉢は⑥の押印があり、藤澤良祐氏による瀬戸擂鉢編年では19世紀前半代のものに相当する。鑄貨には、寛永通寶がある。

小形土製神祠（107）は、土質質のものである。型を用いて製作しているものと考えられる。屋根、観音開きの扉、階段、神像、狛犬を表現している。屋根の下には斗供かと思われる表現がある。類例があまりないので、明確な時期は分からぬが、近世あたりと考えておくのが妥当であろう。

土器器皿類は胎土および成形・調整手法によって分類が可能である。現状では分類以上の意味を持たせることは困難であるが、今後の調査によって当該時期の土器器について詳細な検討が可能となるであろうから、あながち無意味ではないと考える。なお、南伊勢系のもの（70）は、系統の違いが明白なので、ここでは除外する。

土器器皿類は、主に形態・口径・胎土の点から、分類が可能である（第17図）。分類は、形態による分類を重視し、A～D手法に大別する。また、口縁部怪に4者、焼成にも2者が存在する。これらの要素を個々に見ていくこととする。

A形態皿 底面からある程度屈曲を持って開く一群である。器壁は3mm前後である。

B形態皿 底面からある程度の屈曲を持って開き、内面見込みにナゲによる稜を有するものである。器壁は3mm前後である。

C形態皿 明確な稜を持たず開く一群である。

D形態皿 器壁が1.5mm程度の薄手のものである。器壁は3mm前後である。

これらの口縁部径をみると、1・7.5cm前後のもの、2・8.5cm前後のもの、3・10cm前後のもの、4・11cm前後のもの、の4者が存在しているようである。後2者については比較的区分が行い易いが、前2者は漸移的で区分が可能かどうかは再検討の余地がある。先の形態分類に対比すると、A形態皿には1～3が、B形態皿には2～4が、C形態皿には1が、D形態皿には2が、それぞれ存在している。

焼成は硬質のものとやや硬質のものとに大別できる。焼成とA～D形態との関連は明確にはし難く、A・B形態には硬質のものとそうでないものがある。

この分類からは、胎土の相違を越えた形態的・法量的類似を窺うことができる。これが土器製作者の相違なのか、あるいは時期的な相違なのかは、今後の課題となる。

これら土器器皿類については、中世か近世かの判断は現状では行えない。しかし、A形態で口径8.5cm前後のものは猪野町平生遺跡SE50出土の小皿に類似した要素を見出すことができる。また、C形態の要素は少なくとも15世紀以前には見出すことができないものである。これらのことと上述の陶器の年代観からは、A～C形態は13世紀代以降、D形態は16世紀以降19世紀以前のものであることが考えられよう。また、明治30年鑄造の硬貨から、近代あたりまでの時間幅を考える必要もある。

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技術の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No
3	縄文 滅跡?	j 1 1	盛土-90	—	外:押し引き・刺突 内:条痕文	粗0.5~5.0mm の小石、鐵錐	やや歎	淡褐色	小片	縄文早期末 茅山下層式?	5-1
4	縄文 滅跡?	j 1 1	盛土内	—	外:押し引き・刺突 内:条痕文	粗0.5~4.0mm の小石、鐵錐	やや歎	淡褐色	小片	縄文早期末 茅山下層式?	5-3
5	縄文 滅跡?	k 1 2	盛土内	—	外:押し引き・刺突 内:条痕文	粗0.5~4.0mm の小石、鐵錐	やや歎	淡褐色	小片	縄文早期末 茅山下層式?	5-2
6	縄文 滅跡?	j 1 1	埋葬施設堆土	—	外:押し引き 内:不明	粗0.5~3.0mm の小石、鐵錐	やや歎	淡褐色	小片	縄文早期末 茅山下層式?	6-1
7	縄文 滅跡?	k 1 1	盛土-90	—	外:押し引き 内:ナデ	粗0.5~4.0mm の小石、鐵錐	やや歎	淡褐色	小片	縄文早期末 茅山下層式?	5-5
8	縄文 滅跡?	j 1 2	盛土-150	—	外:押し引き・沈線 内:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石、鐵錐	やや歎	淡褐色	小片	縄文早期末 茅山下層式?	5-4
9	縄文 滅跡?	k 1 1	盛土-90	—	外:条痕文 内:条痕文	粗0.5~3.0mm の小石、鐵錐	歎	淡褐色	小片	縄文早期末	6-4
10	縄文 滅跡?	j 1 2	盛土-150	—	外:条痕文 内:条痕文	粗0.5~3.0mm の小石、鐵錐	歎	淡褐色	小片	縄文早期末	6-2
11	縄文 滅跡?	j 1 2	盛土-150	—	外:条痕文 内:条痕文	粗0.5~3.0mm の小石、鐵錐	歎	淡褐色	小片	縄文早期末 の小石、鐵錐	6-3
12	縄文 滅跡?	j 1 2	盛土-150	—	外:条痕文 内:条痕文	粗0.5~4.0mm の小石、鐵錐	歎	淡褐色	小片	縄文早期末	6-5
13	縄文 滅跡?	k 1 1	盛土-110 (底) 9.6	—	外:条痕文 内:不明	粗0.5~3.0mm の小石、鐵錐	やや歎	明~ 淡褐色	底部20	縄文早期末	17-3
14	縄文 滅跡?	j 1 2	盛土-150	—	外:抜取および縄文・口縁部に鐵錐 内:不明	粗0.5~3.0mm の小石(多)	やや歎	淡褐色	小片	縄文中期?	5-7
15	縄文 滅跡?	k 1 1	埋葬施設堆土東	—	外:沈線文 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	やや歎	淡褐色	小片	縄文中期?	5-6
16	弥生 磁	j 1 1	盛土-100 (口) 8.6	—	外:口縁部および口縁下に 鉛線文、箱形に傳播 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	歎	淡褐色	口縁20	弥生中期 摩擦試験記載	16-3
17	弥生 磁	j 1 3	盛土-150	—	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデのちキザミ目文	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐色	口縁10	弥生後期?	16-4
18	弥生 磁	h 1 0	周溝埋土下 (底) 7.4	—	外:ハケメのちナデのち 密に手縫竹管模様文 内:ヨホリのちヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐色	体部上半30	弥生中期 密度あり	17-2
19	弥生 磁	k 1 1	灰層上 (口) 23.2	—	外:口縁部にキザミ目文? 瓶部にヨコナデのち目文? 内:ヨコナデ	粗0.5~4.0mm の小石	歎	淡褐色	口縁20 瓶部25	弥生後期 密度あり、調整は極めて不明瞭	17-1
20	弥生 高环	j 1 1	盛土 (脚住) 4.0	—	外:櫛指模様文 内:脚部にシリリ目、环創 不明	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐色	脚住上部100	弥生後期	15-6
21	弥生 高环	k 1 0	周溝埋土 (脚住) 3.8	—	外:ハケメのち櫛指模様文 内:脚部にシリリ目、环創 不明	粗0.5~3.0mm の小石	良好	明褐色	脚住上部100	弥生後期(欠山窓) 3方透かし	15-5
22	弥生 高环	j 1 1	上部盛土 (脚住) 4.2	—	外:ハケメギサ 内:脚部にシリリ目、环創 不明	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡褐色	脚住上部60	弥生後期	15-4
23	弥生 高环	k 1 2	上部盛土 (脚住) 16.0	—	外:ヨコナデのちハクミガ 内:ハケメのちナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐色	脚住20	弥生後期	15-1
24	弥生 磁	調査区 外	(撲没) 3.2	—	外:刺繩 内:刺繩	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡赤褐色	上部25	弥生中期	16-1
25	弥生 磁	h 1 2	周溝埋土下 面 (口) 13.2	—	外:ヨコナデのちキザミ目 文・櫛指模様文 内:ヨコナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡褐色	口縁20	弥生後期 近江系	15-3
26	弥生 磁	j 1 2	盛土-130 (口) 16.6	—	外:ハケメのちヨコナデの ちキザミ目文(2列) 内:ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐色	口縁10	弥生中期 外面に保たれて	15-2
27	弥生 磁	k 1 2	盛土内 (底) 5.3	—	外:刺繩 内:刺繩	粗0.5~2.0mm の小石	やや歎	明褐色	底部25		16-6

第1表 出土土器観察表(1)

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技術の特徴	胎土	表成	色調	残存度(%)	備考	実測No
28	弥生 壺	j 1 2	盛土-120	(底) 5.3	外: 刻離 内: 刻離	粗0.5~4.0mm の小石(多)	やや歎	赤褐色	底辺50		16-5
29	弥生 壺	調査区 外	段丘斜面下 表層	(底) 8.9	外: ハケメのちナデ 内: 刻離	粗0.5~4.0mm の小石	良好	淡褐色	底部100	弥生中期?	18-1
33	須恵器 壺 蓋	k 1 1	埋葬施設 p 1	(口)13.7	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~1.0mm の小石	やや歎	淡褐色	口縁部20	やや瓦質の焼成	9-3
34	須恵器 壺 蓋	k 1 1	埋葬施設 p 2	(口)14.0	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	口縁部25		9-2
35	須恵器 壺	k 1 1	埋葬施設 p 5	(口) 8.9 (高) 21.4	外: 回転ナデ・凹凸・タタ キ目と手縫合部接続のち回 転ナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡褐色~灰	口縁一部欠損 のみ	変形手法は表面と同じ に縦筋は束縛的に打ち 欠いている。やや瓦質 の焼成	11-1
36	須恵器 壺 杯	j 1 1	S H 1 p 2 " p 3	(口)11.0	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~1.0mm の小石	堅敏	淡褐色	口縁部30 (3片)		7-3
37	須恵器 壺 蓋	j 1 1	S H 1 p 1 1	(口)14.3 (高) 4.9	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデのちナデ	粗0.5~2.0mm の小石	堅敏	青灰	口縁部30	断面茶褐色を呈する。	7-2
38	須恵器 壺 身	j 1 1	S H 1 p 1 2	(口)11.8 (高) 4.7	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデのちナデ	粗0.5~4.0mm の小石	堅敏	淡褐色~灰	完形		7-1
39	土器器 壺	j 1 1	S H 1 p 1 2	(口)14.0	外: オサエ・ハケメのちコ ガテナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石、赤色 粒	やや歎	淡褐色	口縁部30	体部内面は剥離	7-4
42	土器器 台 付便	j 1 1	上部盛土 -70	(調査) 9.8	外: オサエ・ナデのちハケ メ 内: ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡褐色	脚台50		13-5
43	土器器 台 付便	j 1 2	盛土-140	(口)16.6	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐色	口縁部30		14-1
44	土器器 台 付便	j 1 2	上部盛土	(口)14.0	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	やや歎	淡褐色	口縁部20		14-2
45	土器器 壺	j 1 1	埋葬施設埋 土	(口)18.3	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡褐色	口縁部20	内面に炭化物付着	14-3
46	土器器 壺	j 1 2	上部盛土	(口)16.8	外: ハケメのちヨコナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐色	口縁部12		14-4
47	土器器 脼	j 1 2	埋葬施設p 6・7・9	(口)29.6	外: 刻離 内: 刻離	粗0.5~2.0mm の小石	歎	淡褐色	口縁部25 (2片)	口縁部の成形手法は台 付便と同じ。	14-5
48	須恵器 壺 蓋	j 1 1	上部盛土	(口)13.5	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	堅敏	淡褐色	口縁20		8-2
49	須恵器 壺 蓋	j 1 2 j 1 3	盛土-130	(口)12.8	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	やや歎	白灰	口縁20		12-4
50	須恵器 壺 蓋	j 1 2	上部盛土	(口)15.0	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	堅敏	淡青褐色	口縁20 (2片)		7-5
51	須恵器 壺 蓋	i 1 2 h 1 2 他	灰層上 周溝 他	(口)14.6	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~1.0mm の小石(多)	堅敏	青灰	口縁50	断面の色調は茶褐色	8-4
52	須恵器 壺 蓋	k 1 2	盛土-140	(口)15.0	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	堅敏	淡褐色	口縁12		12-2
53	須恵器 壺 蓋	j 1 2 j 1 1	上部盛土 盛土-140 壇丘上	(口)15.6	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~5.0mm の小石	堅敏	淡褐色~灰	口縁60	上部にヘラ焼き文あり	9-4
54	須恵器 壺 蓋	k 1 2 j 1 2 他	壇丘上 壇丘上	(口)15.0	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	堅敏	淡褐色	口縁40 (3片)		13-3
55	須恵器 壺 蓋	k 1 1 k 1 2	盛土-90	(口)15.2	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	やや歎	淡褐色	口縁30		9-1
56	須恵器 壺 蓋	j 1 1	上部盛土 淡黃褐色土	(口)14.6 (高) 5.0	外: 回転ナデのちハケメ 内: 回転ナデ	粗0.5~4.0mm の小石	良好	淡褐色~灰	85	内面上部に円形叩き目 模あり	10-2
57	須恵器 壺 身	i 1 2	盛土下部 周溝下層	(口)11.2	外: 回転ナデのち回転ケズ 内: 回転ナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡青褐色	口縁40		8-3

第2表 出土土器観察表(2)

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調査・技法の特徴	地 土	焼成	色調	保存度(%)	備 考	実測No
58	須恵器 环身	k 1 2 k 1 3 j 1 1	盛土-120 盛土下部 上部盛土	(口)11.0 (高) 4.2	外:回転ナデのち回転ケズ リ 内:回転ナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅歯	淡灰	体部80	外面に自然難	8-5
59	須恵器 环身	j 1 1	上部盛土 淡黄褐色土	(口)11.9 (高) 4.0	外:回転ナデのち回転ケズ リ 内:回転ナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅歯	淡灰~灰	20		12-3
60	須恵器 环身	k 1 2 p 1	墳丘盛土	(口)12.2 (高) 5.1	外:回転ナデのち回転ケズ リ 内:回転ナデ	密0.5~1.0mm の小石	軟	淡墨灰	100	焼成後めて擦痕	9-5
61	須恵器 环身	k 1 2	盛土-130	(口)11.4	外:回転ナデのち回転ケズ リ 内:回転ナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅歯	内面淡 灰、外 面灰	口縁20		8-1
62	須恵器 环身	k 1 2 k 1 1	上部盛土	(口)12.5	外:回転ナデのち回転ケズ リ 内:回転ナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅歯	淡青灰	口縁40		10-1
63	須恵器 环身	j 1 1 k 1 2	墳頂部表土 崩落土 墳丘上	(口)11.6 (高) 4.7	外:回転ナデのち回転ケズ リ 内:回転ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡青灰	体部30	やや瓦質	8-6
64	須恵器 高环	j 1 2	盛土-100	(口)12.4	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密0.5~1.0mm の小石(多)	堅歯	暗灰	口縁30	断面の色調は濃茶色	12-1
65	須恵器 高环	h 1 2	周溝下層	(口)15.0	外:回転ナデのち枝状文 内:回転ナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅歯	暗青灰	口縁20 (4片)	断面の色調は濃茶灰色	13-4
66	須恵器 高环	j 1 2 j 1 1	盛土-90 墳丘盛土	(高幅) 11.2	外:回転ナデのち透かし 内:回転ナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅歯	暗青灰	口縁40 (2片)	透かしは3方向	12-5
67	須恵器 壺	k 1 2	上部盛土	(口)16.4	外:回転ナデ・カキメ 内:回転ナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅歯	暗青灰	口縁50 (5片)		13-1
68	須恵器 壺	j 1 1	表土	(口)17.0	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅歯	淡灰~ 暗灰	口縁20		13-2
69	陶器 瓢	j 1 3	表土	—	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅歯	淡灰灰	口縁10未満 (4片)	山茶柄	2-15
70	土器器 盆	k 1 1	SK 1	(口)10.0 (高) 2.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	やや歯	淡灰灰	口縁90	向伊勢系	4-1
71	土器器 盆	j 1 3	表土	(口) 7.6 (高) 1.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡灰灰	100	油煙痕あり。	1-13
72	土器器 盆	k 1 3	表土	(口) 7.4 (高) 1.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡灰灰	90	油煙痕あり。	2-5
73	土器器 盆	j 1 3	南側面土器群 p 19	(口) 7.8 (高) 1.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡灰	60		4-4
74	土器器 盆	k 1 3	南斜面土器 群 p 4	(口) 8.0 (高) 1.8	外:オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	やや歯	淡灰灰	100		1-3
75	土器器 盆	k 1 3	表土	(口) 6.8 (高) 1.2	外:オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄褐	60		2-9
76	土器器 盆	k 1 3	表土	(口) 7.0 (高) 1.4	外:オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	赤褐色 断面 淡灰灰	60 (3片)		2-10
77	土器器 盆	j 1 3	南側面土器 群 p 8	(口) 8.0 (高) 1.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐	100	油煙痕あり。	1-6
78	土器器 盆	k 1 3	南斜面土器 群 p 10	(口) 8.6 (高) 1.7	外:オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐	100		1-4
79	土器器 盆	j 1 3	南側面土器 群 p 14	(口) 9.0 (高) 1.6	外:オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐	60		2-13
80	土器器 盆	k 1 3	南側面土器 群 p 7	(口) 10.1 (高) 1.8	外:オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mm の小石、赤色	やや歯 粒	乳灰	100		1-2
81	土器器 盆	j 1 3	南側面土器 群 p 9	(口) 8.8 (高) 1.8	外:オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐	40		2-8
82	土器器 盆	k 1 3	南側面土器 群 p 2	(口) 9.4 (高) 1.6	外:オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡灰灰	100		1-1

第3表 出土土器観察表(3)

No	器種	地区	遺構・層名	法寸(cm)	調査・採法の特徴	地 土	焼成	色調	残存度(%)	備 考	実測No
83	土器器	田 k 1.3	南側土器群 p 1	(口) 9.0 (高) 1.7	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	50		2-11
84	土器器	田 j 1.3	表土	(口) 10.2 (高) 1.7	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	はほほ100		2-1
85	土器器	田 j 1.3	表土	(口) 9.6 (高) 1.7	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	50		2-14
86	土器器	田 j 1.3	南側土器群 p 5	(口) 10.2 (高) 1.5	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	50		1-10
87	土器器	田 k 1.3	表土	(口) 9.9 (高) 1.4	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	やや歎	乳灰	100	油煙痕あり。	2-2
88	土器器	田 j 1.3	南側土器群 p 11	(口) 8.4 (高) 1.8	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	100	油煙痕あり。 内面に墨書き「□□ち」	1-7
89	土器器	田 k 1.3	南側土器群 p 3	(口) 9.4 (高) 1.9	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	60		2-7
90	土器器	田 j 1.3	南側土器群 p 18	(口) 10.0 (高) 2.2	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	90		4-3
91	土器器	田 j 1.3	南側土器群 p 16	(口) 9.9 (高) 2.1	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	はほほ100		4-2
92	土器器	田 j 1.3	南側土器群 p 13	(口) 10.7 (高) 2.1	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	60		2-6
93	土器器	田 k 1.3	表土	(口) 8.6 (高) 1.9	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	やや歎	乳灰	70	油煙痕あり。 内面に墨書き「神」	1-9
94	土器器	田 j 1.3	南側土器群 p 15	(口) 8.2 (高) 1.6	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	やや歎	乳灰	100	油煙痕あり。	2-12
95	土器器	田 k 1.3	南側土器群 p 6	(口) 8.8 (高) 1.7	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	乳灰	100		1-5
96	土器器	田 k 1.3	表土	(口) 8.2 (高) 1.5	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰 黒茶灰	90		2-4
97	土器器	田 j 1.3	南側土器群 p 12	(口) 8.9 (高) 1.5	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	はほほ100	油煙痕あり。	1-8
98	土器器	田 k 1.3	表土	(口) 8.6 (高) 1.6	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	はほほ100		2-3
99	土器器	田 j 1.3	南側土器群 p 13	(口) 10.6 (高) 1.9	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	乳灰	100		1-11
100	土器器	田 j 1.3	表土	(口) 11.0 (高) 2.5	外: オサエ・ナデのちヨコ ナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	40		1-12
101	陶器 台付	田 k 1.3	表土	(口) 5.8 (高) 4.0 (底) 4.7	外: ロクロナデのち糸切り のちケズリ 内: ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅致	淡灰 青緑灰	ロコ30 台付はほほ100	内面に灯芯の受部あり	3-2
102	陶器 壺	田 h 1.2	表土	—	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	粗0.5~9.0mm の小石	堅致	淡褐色	ロ線10木束	着滑度	3-4
103	陶器 壺	田 k 1.3	表土	(口) 16.6 (高) 3.3	外: ロクロナデのちケズリ 内: ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅致	淡白茶 青緑灰	40		3-3
104	陶器 横鉢	田 l 1.2	表土	—	外: 回転ナデ 内: 回転ナデのち腰り目	密0.5~1.0mm の小石	堅致	茶灰 青緑灰	ロ線下部10	腹内處 内面に押印	3-5
105	瓦質土器 器種不明	田 l 1.4	表土	—	外: ナデのちスタンプ 内: 刃鉢	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	?	外面に黒灰色 スタンプは薄か	18-4
106	瓦質土器 器種不明	田 j 1.3	表土	(口) 31.9	外: ナデのちヨコナデのち ケズリ 内: ヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	暗灰	ロ線12	外面のケズリは鋸部の 面取りである。	3-1
107	土器器 小形土製神	田 k 1.3	表土	(高) 4.2 (幅) 1.8	形押し或形	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐色	はほほ100	底板の表面は裏面には ない。	4-5

第4表 出土土器観察表(4)

V. 調査のまとめ

今回の調査は、東桜野2号墳に相当する部分のみという、極めて限定された面積での調査であった。しかし、多くの点で興味深い事実が見出され、当該地域の歴史解明のために貴重な成果となったといえよう。

具体的な検討は、資料の増加を待って行う必要があるが、ここでは調査によって得た事実からいくつかの問題点を挙げてまとめに代えたい。

1. 繩文・弥生時代の遺跡に関して

調査前には予想していなかった縄文・弥生時代の遺構・遺物が出土した。これらは、基本的に東桜野遺跡に伴うものと考えるのが妥当であろう。遺構は弥生時代のピットが確認されたのみで、その他は明確にできなかった。しかし、東桜野2号墳の南に広がる東桜野遺跡において当該時期の遺構が確認される可能性は大きいといえよう。

縄文早期末に相当する土器群には、広義の茅山下層式と考えられるものが確認できた。当該時期の良好な資料は、度会町・上ノ坂外遺跡で近年確認されている。当該時期の資料の増加を待って分布の傾向などを探る必要があろう。

2. 古墳時代の遺跡に関して

古墳時代のものには、東桜野2号墳および下層の堅穴住居がある。まず、東桜野2号墳に関する問題点を挙げておこう。

・盛土に関して

東桜野2号墳の構築方法は、基本的には墳丘外縁部から盛土をはじめ、順次中央部に至るものである。ただし、第7図に示した通り、北側の部分については外縁部に盛土の後、中央部から外側へと盛土を行う方法を用いている。墳丘盛土の下部ほど盛土の単位が細かいという傾向も指摘できる。

墳丘外縁部に若干の盛土を行った後、中央部に炭屑が形成されている。これは当然のことながら中央部に向かってレンズ状に堆積する状況を示す。この層が旧表土に相当するものでないことは確実であるが、何によってできた層なのかは判然としない。墳

丘構築以前の何らかの祭祀に伴うものであることも考えられよう。

・東桜野2号墳と下層堅穴住居の関係

東桜野2号墳から出土した須恵器は、田辺編年のTK43型式併行とみるのが妥当であろう。そして、堅穴住居SH1出土須恵器は田辺編年のTK10型式併行と見做される。すなわち、両者の時期的な隔たりは、型式的には存在しないといえる。

ここで問題なのが、古墳の下層に時期的に近接した堅穴住居がなぜ存在していたのかということである。堅穴住居SH1が、焼失家屋である可能性も含めて、考える必要がある。

まず考えられるのは、古墳が構築される以前にこの丘陵が古墳時代の集落であったことである。東桜野2号墳の盛土内からTK23型式を上限とする須恵器が出土していることは、この想定のひとつの根拠となる。しかしこの丘陵には、開拓される以前に多くの古墳が存在していたという情報がある。このことから、仮に集落が存在していた場合、古墳群と集落が同一地内に同時に存在していたことになる。このような例はあまりなく、次年度以降の東桜野遺跡の調査成果が注目される。

一方、古墳に関連した施設であるという想定も可能であろう。堅穴住居跡が一辺2mほどの極めて小形なものであることや、土器の型式学的な連続性から想定できよう。古墳の下に堅穴住居跡を確認した例は三重県下では津市・元井池古墳、古墳に隣接して堅穴住居跡を確認した例には津市・君ヶ口古墳がある。元井池古墳の下層で確認された堅穴住居跡は明確な主柱穴を持たない点で、東桜野2号墳での例に類似したものといえる。堅穴住居SH1内のピット1を炉しないはカマドと考えるにしても、かなり簡略された施設であると見做されよう。問題は、東桜野2号墳と堅穴住居SH1が土器型式としては連続したものではあっても、実際の年数としてどれだけの差があるのかである。この施設を「モガリ」に関連するものと考えるために、幾つかの解決しなければならない問題がある。

3. 中～近世の遺物について

中～近世の遺物で最も注目されるのは今回分類を行った土師器皿類である。これらは13世紀初頭あたりから18・19世紀までのものが混在しているものと考えられる。具体的な実年代は今回の資料で把握することは不可能であるが、それ以外のいくつかの問題点を指摘しておきたい。

まず、墨書のある皿についてである。今回出土した土師器皿類には、3点の墨書き土器があった（1点は実測不能である）。これらは全て土器の内面に墨書きが認められるものである。墨書き文字に「神」の字があることから、古墳に隣接する神社跡に関連し、神事に用いられたものと考えられよう。

中世以降の墨書き土器は、山茶碗には多く存在するものの、土師器皿類にはあまり見られないものである。また、山茶碗の墨書きは大部分が底部や外面に見られるものであるが、内面に墨書きをする例は少なくとも中世前期には存在しない。その意味からも内面に墨書きをする意味は興味深い。

また、灯明皿として用いられていた資料がいくつか存在している。墨書きの認められる資料2点は、明らかに灯明皿として用いられたことが窺え、その意味についても今後の検討が必要であろう。

以上、今回の調査から得られた問題点を指摘してきた。次年度以降に調査を行う東桿野遺跡の調査によって解決される点もあるうし、さらに疑問が深まることがある。いずれにしても、調査によって得た各時代の事例は、今後の研究のために貴重な成果であったと考える。

（註）

- ① 駒田利治ほか『一般国道1号龜山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要』VI（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990）
- ② 小玉道明ほか『井田川茶臼山古墳』（三重県教育委員会 1988）
- ③ 野田修久・伊藤裕作『三重県』（『定型化する古墳以前の墓制』第24回埋蔵文化財研究会 1988）
- ④ 和田年弥『古墳文化の地域的構造とその特質—伊勢国鈴鹿地方の場合—』（『古代学研究』72 1974）および註①文献参照。
- ⑤ 田辺昭三『陶邑古窯址群』I（平安学園考古学クラブ 1966）
田辺昭三『須恵器大成』（角川書店 1981）
- ⑥ 伊藤裕作『中世南伊勢系の土師器に関する一試論』（『Mie history』vol. 1 1990）
- ⑦ 泉拓氏・奥義次氏・田村陽一氏・徳積裕昌氏の御教示による。
- ⑧ 日本貨幣商共同組合編『日本貨幣型録』82年版（1981）
- ⑨ 藤澤良祐『瀬戸古窯址群 I』（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』I 1982）
- ⑩ 藤澤良祐「本業焼の研究（2）」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅳ 1988）
- ⑪ 吉村利男ほか『平生遺跡発掘調査報告』（平生遺跡調査団1976）
- ⑫ 徳村精治『上ノ坂外遺跡発掘調査概報』（度会町教育委員会1991）
- ⑬ 吉村利男ほか『元井池古墳発掘調査報告』（三重大学歴史研究会1969）
- ⑭ 萱室康光ほか『君ヶ口古墳発掘調査報告』（津市教育委員会1974）

写 真 図 版



埋葬施設全景（東から）

調査前の状況



遠景（北西から）



近景（南西から）



南西から



墳丘西斜面の調査



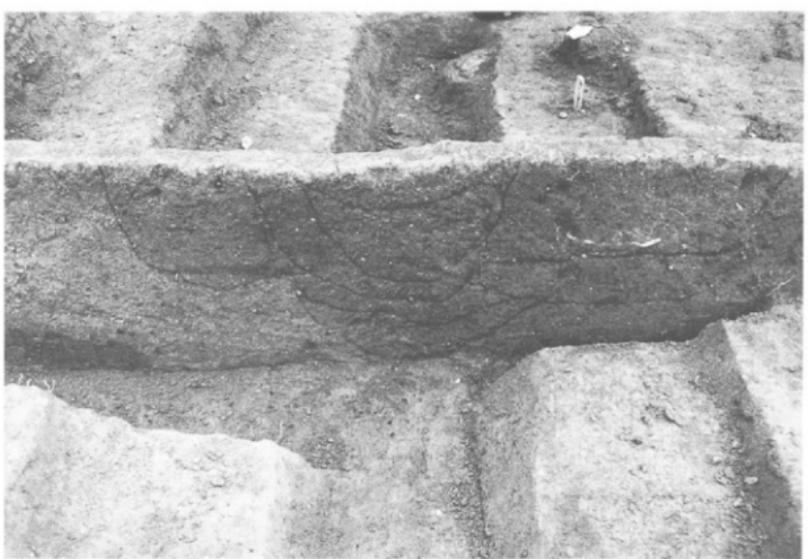
SK 1 遺物出土状況（西から、土器番号70）



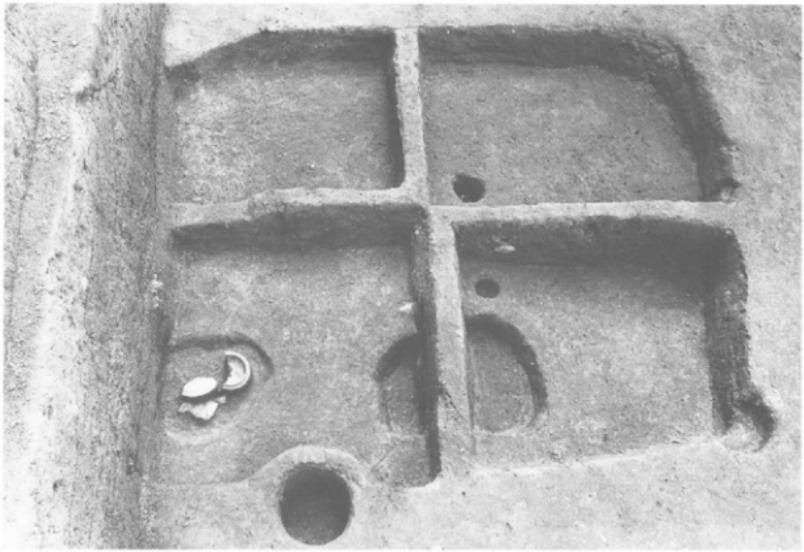
墳丘南斜面土器群出土状況（南から）



埋葬施設



壁穴住居SH-1

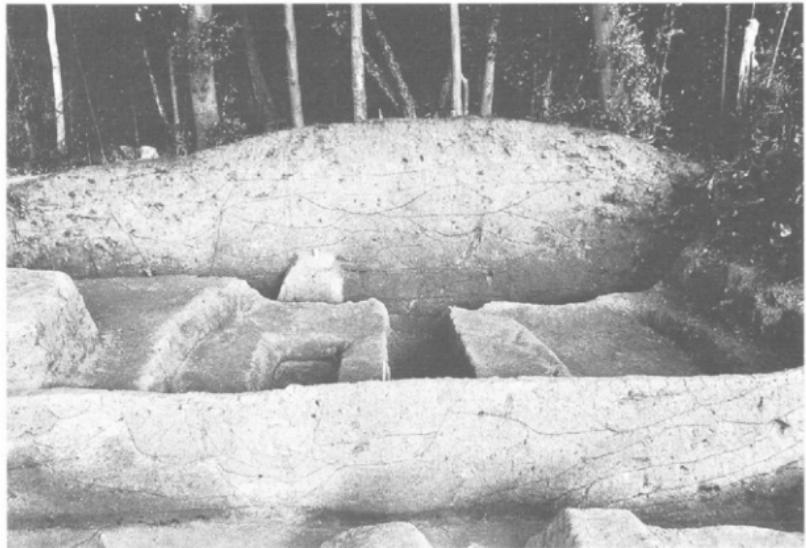


全景（北から）



土層断面（西から）

図版 6



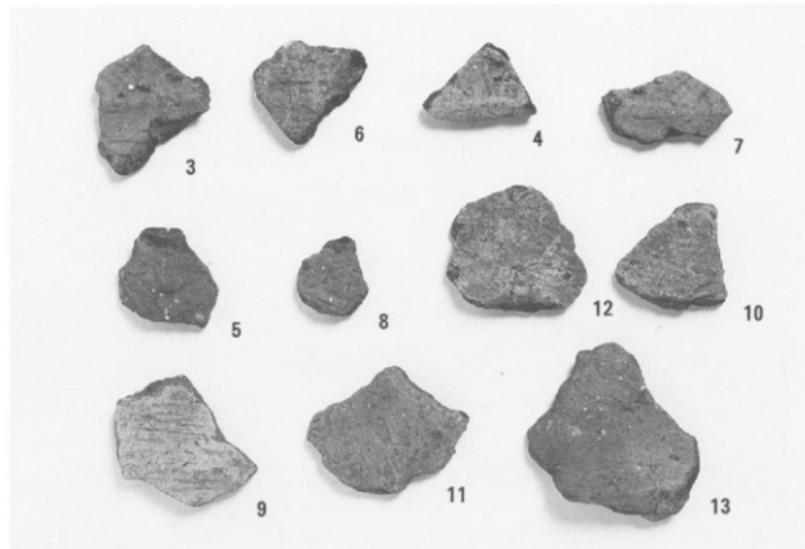
墳丘土層断面

東壁土層および中央層（西から）

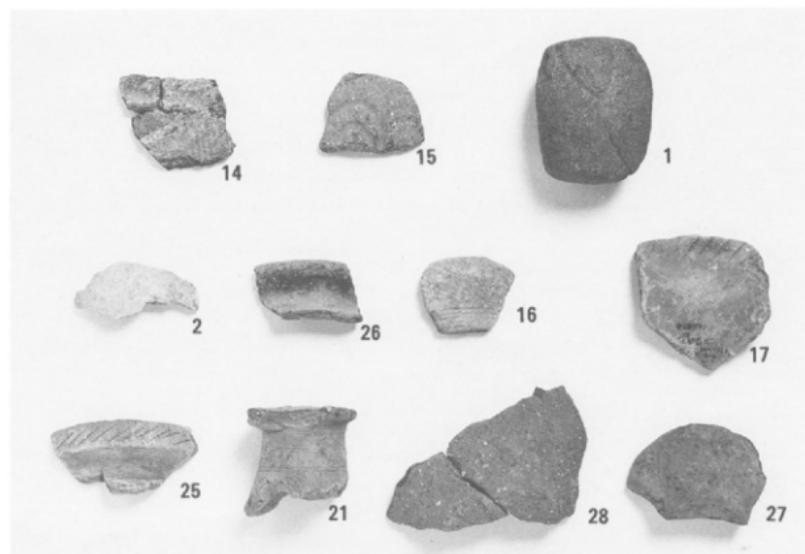


墳丘中央土層（南西から）

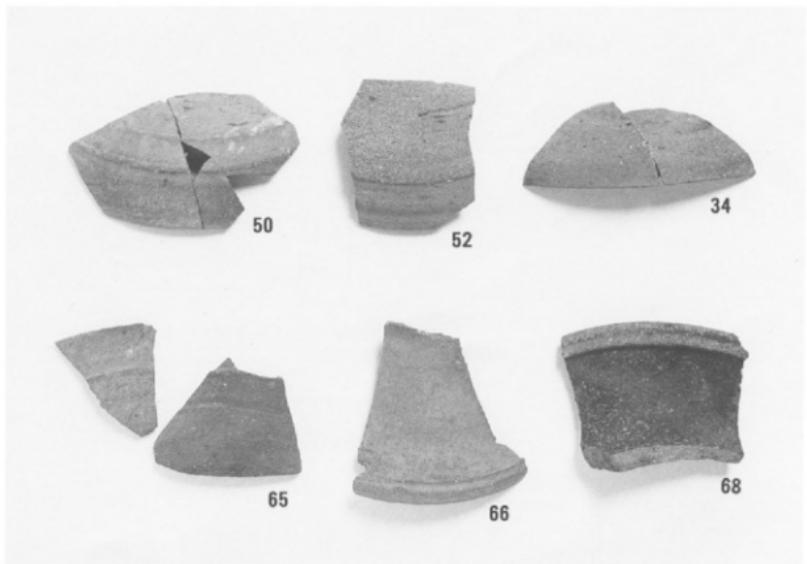
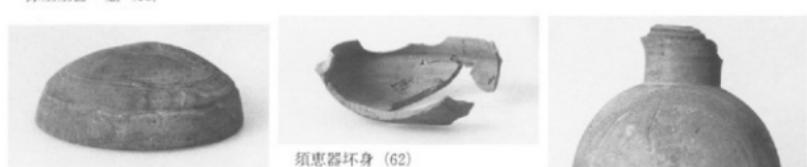
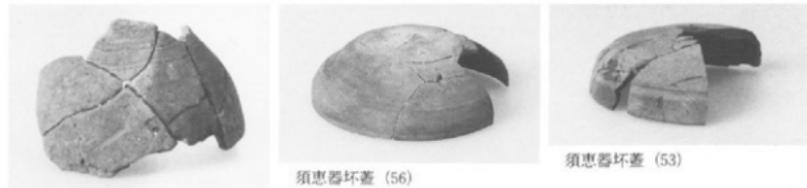
出土遺物
(1)



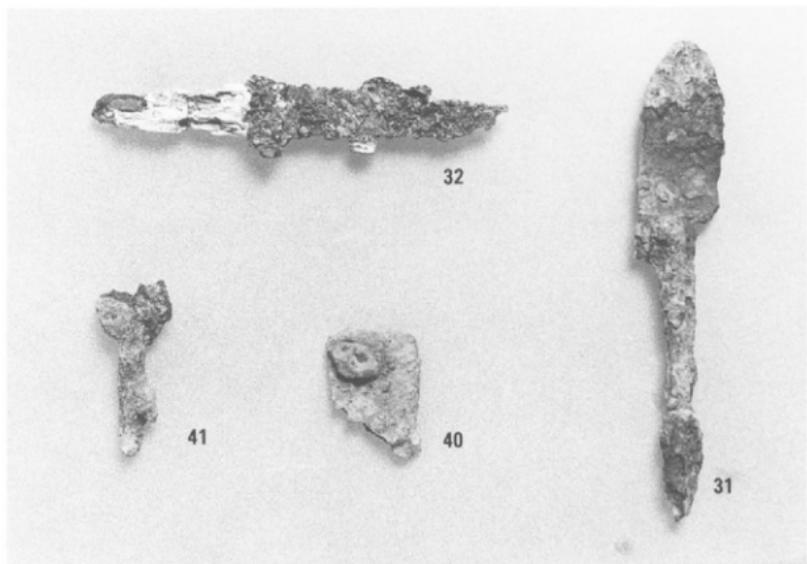
縄文土器



縄文・弥生土器、石器



須恵器



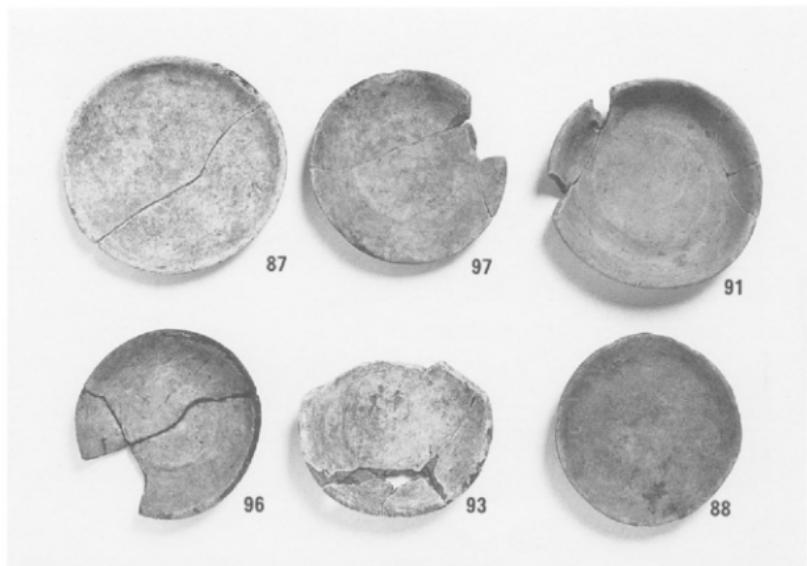
鉄器類



石製紡錘車 (1 : 1)



小形土製神祠



土師器四類（内面）



土師器四類（外側）

平成 4(1992) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 1 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告102

国道306号線道路改良事業に伴う
東樺野 2 号墳・東樺野遺跡発掘調査報告
—亀山市管内町所在—

1992 (平成 4) 年 3 月

編 集 行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 光出版印刷株式会社
